各戸持ち寄りで、宿は三戸ずつがあたり、毎年、門廻りで役割を定め、釜方、剛力、賄方、世話人など分担される。

大臼に一回四升ほどのふかしを入れ、千本杵で剛力役の若者たちが唄をうたいながらにぎやかにつきあげる。

『揃ったよこの餅つきは稲の出穂よりよく揃った　ハアーヨイヨイヨイ』

『庭で餅ついて座敷に投げた、婿と嫁が一ねばり』

こうして餅つきは一日中続く。若者たちはつき上げるたびに餅を食べ、一日一升から一升五合ほどの餅を食べる。

夜は役付の人たちの慰労のため宴会が開かれて、いろいろの演芸などにぎやかにくりひろげられる。

こうした部落の年中行事も、戦時中の食糧困難期を境に、中止となってしまった。いまは当時をしのぶ千本杵と臼だけが残っているのみである。

（話者　小林要作）

豆まつり　《堀込》

その昔、八幡太郎義家が戦に敗れて逃げる途中、堀込地内にさしかかった。

時は六月頃であった。畔道伝いに逃げる義家は、畔にまいてある豆に足をとられ難儀していた。それ